

正宗白鳥

ヘルシンの旧居



# ヘルンの旧居



神武天皇祭の日、出雲に於けるラフカチオ、ヘルンの旧居を訪ずれた。大社参拝を果してから、汽車で松江へ後戻りすると、何よりも小泉八雲先生の遺跡を一覧するつもりで、人力車の上から市中を見物しながら、其方へ向った。車は市の場末らしい所で留ったが、そこには、乗合自動車の停留所が有って、ヘルン旧宅と記してあった。松江市の名所として来訪者の多いことが察せられた。日本でも文豪に対して、民衆の敬意と興味とが次第に寄

せられつつあるのかも知れない。

荒廃した旧跡が保管されているのかと思ったら、その家には現在、人が住んでいた。「人の家へ入ってもいいのか」と訊くと、車夫は「かまいませんとも」と答えて、門を入って玄関で案内を乞うた。その時、中年の細そりした、品のいい、しかし鬱陶しい顔した婦人が、横合から出て来て、車夫の頼みを聞くまでもなく、用向を心得ているらしく、「どうぞお入りなさいまし」と云って、自分から先に立って、玄関の障子を外から開けて、私の方を見た。私は、遠慮しいしい随いて行っただが、玄関脇

の部屋には、小机の上に、「出雲に於ける小泉八雲」という著書や絵端書が、来訪者の需もとめに応じて売らるべく具え付けてあり、且つ、維持費の寄附を望む文字も人目に触れるように記されてあつた。

こういう風だと、遠慮するには及ばなかつたと、私は心を取直して、普通の名所見物の態度になつたが、この家の主婦らしい案内者は、ふと、「此間、主人が亡くなりまして」と云つた。私が小机の上から目を転じて、部屋の一隅に、位牌が置かれ、香煙縷々として、その下には、数多あまたの香奠こうでん包みうづたかが堆高うづたかく置かれてあるのを見て、不

思議に思ったのを、主婦は勘付いてそう説明したのであった。私は、これも不思議な縁の一つとして、弔辞らしい言葉を述べ、位牌に目礼した。主人というのは、この家の持主で、ヘルンはこの人の先代から家を借りたのであろうと、私は察した。当時の家賃は三円であったそうだが、ヘルンは、この家を甚だ愛好していたのである。三方が庭で、昔風の日本趣味から云うと、風雅な住居と云っていい。ヘルンは、この庭について、こう云っている。

「庭は屋敷の前部を占め、南に面し西に拡がって北側の庭に接続し、其処に珍奇な袖垣（今は取去られた）があ



って、二つの庭の境を成して居る。庭には厚く苔蒸こけむした  
 大きな岩がある。様々な形の石の手水鉢ちようずばちや年代を経て青  
 味を帯びた石燈籠がある——老木のある築山があり、花  
 咲く灌木に覆われた川岸のような長い緑色の傾斜地があ  
 り、島のような丘がある。総て是等の高みは絹の如く滑  
 かな淡黄色の砂を敷詰めて迂曲した川筋を模した際から  
 隆起して居る。此砂を敷いた場所には——平たい自然石  
 を一つ一つ多少の間隔を置いてあちらこちらの方向に配  
 列してあるから、あとか恰も小川を横ぎる踏石のような趣き  
 がある」

今は古木の梅が満開で、木蓮の花もふくらみかけていた。素人の造った庭であるためか、ごたごたして、純日本趣味に洗練されている人には飽足らないと思われたが、手軽な貸家としてこのくらいな庭のついた家を得られたのは、すべての趣味に異国情緒を覚えて自己陶醉に耽ったヘルン先生のために幸福であった。

この家は、相当に身分のよかった昔の武士の住居であったのであろうが、私は、かつて伊予の松山に遊んだ時に一泊した知人の家が、昔の所謂「家中屋敷」なるものであったことを思出した。

郷里の私の先祖の家なんかは、信州追分の油屋という家が、昔の本陣の見本である如く、封建時代の一種の農家の見本とも云うべく、何でこんな、採光や通風を無視した住みよくはなさそうな、形式美をも無視した家を建てたことかと思われるが、ただ無骨で頑丈なことだけはたしかであった。これとちがって、松山の家やヘルンの旧宅などは、いかにも脆弱ぜいじやくであって、簡素というよりも、むしろ貧寒であると云っていい。昔の武士は貧乏で止むを得ずこんな家にいたのか、或はこういう住居を愛好する趣味を有っていたためであろうか。流石さすがのヘルン

も、松江の冬には非常な困難を感じたらしい。「寒暖計は氷点下約十二度より下ることはないが、しかし、家中は家畜小屋のように寒くて、火鉢も炬燵こたつもほんの火の気の影——幽霊、幻影のような物に過ぎぬ」と云っている。数個の火鉢に取囲まれて辛うじて冬を過し得られたそうである。

好んで日本風の生活を真似るのは、随分の物好きであって、それによって、ヘルンの変人たることが証明されるので、大抵の日本鼻肩びいきの外人は、自分はちゃんとしたホテルに収まって、文明国の生活振りを営みながら、日

本人が昔ながらの生活をするのを傍観し鑑賞することを喜んでいるのだ。ヘルンにしたって、田舎の人々が、いつまでも、菅笠を被て、草鞋わらじ脚絆を着けて、駄馬に荷物を運ばせながら、追分節でも唄っているのを、御自分は葉巻でも吸いながら、夢心地で見っていたかったのだ。貨物自動車なんかの輸入は好まなかったにちがいない。

ヘルンの日本観は、必しも日本の現実に透徹しているのではない。しかし、日本の自然美をも、日本精神の現われをも、新しい目で見ている。日本の文人が十世紀の間も、相変らずの、千篇一律の花鳥風月趣味で自然を鑑

賞して来たのとは異っている。日本人が西洋の自然や人事を、自分の趣味から新しく見たら旧套を破って面白いだろうが、我々は、ヘルンとは異って、西洋に対して、先入主としていろいろな知識が取入れられてあって、その支配を脱せられないのだ。ヘルンがろくでもない瀬戸物の唐獅子や、石仏や、ろくでもない絵馬などを見て無心に讚美したような純な気持で、外国のものを鑑賞する訳に行かないのである。

ヘルンは、西洋人の珍らしかった時代に、田舎の町に來たのであったが、兎に角周囲の人々に尊敬されていた

そうだ。月給だって、ほぼ校長の倍額である百円も取っていた。明治二十三年頃の百円である。世界を流浪して、肉親とも縁の薄かった彼れである。「こんな醜い姿を残すものではない」と、自分の写真を截きったような彼れである。それが、多額な定収が得られ、周囲には尊敬され、貞淑な夫人をも得たのである。好意を有って松江の風物に対するのは当り前であろう。

私は、主婦の説明を聴き、暫くヘルンを追想した。私は、ただ一度、早稲田の教師控室で、彼れを瞥見べっけんしたことがあったが、旧居の壁に掲げられてある横顔の写真の

通りであった。あの時の彼れはパイプを啣くわえていた。

私は、一回もヘルン先生の講義を聴く機会を得なかつたことを遺憾としている。私は、漢学塾、宣教師学校、早稲田の学堂など、いろいろな所でいろいろな教師から教を受けたが、追懐して、深い印象を受けたと思われる物は少い。学校の先生方のよりも、むしろ内村鑑三氏の講演の方が、私の心魂に徹するものを有っていたようである。文学についても氏の講演によって啓発されたところが少くなかった。若しヘルン先生の講義でも聴いていたら、くりやがわ厨川白村氏などのように極度のヘルン礼讃を



したかも知れない。無論私も間接にはヘルン先生の教を受けている。私はヘルン著作の幾つかを読んだものでは、日本印象記よりも怪談よりも、その文学評論によって得るところが多かったと思っている。日本の学生のための講義であるために、外国文学論も我々には分り易くっていい。実際は、日本の外国文学通の外国文学論なんか、外国評論家などの所説の継ぎはぎに過ぎないので、生命に乏しい。

そうかと云って、自己独得の見解を下したらしいものは、迂闊に信用は出来ないように思われる。ヘルンのよ

うに鑑賞力が豊かで、英文でも仏文でも、自国語と同様に、自在に読み語り話せる人から、かみくだ啮碎いて分り易く説かれてこそ、我々は啓発されるのである。

私は、この家の主人の著わした「出雲に於ける小泉八雲」を購あがなって、主婦に暇を告げた。車夫に向つて、「ここへはおりおり見物人が来るんだね」訊きくと、

「一年のうちには一万人も来ます。今日も祭日だから、学生の団体が来ました」

一万人とは少しおまけがあるらしかったが、兎に角、多数の見物が立寄るとすると、可成りの維持費が得られ

る訳である。ヘルンのようないい店子たなこを有った家主は幸であると思われた。

次手ついでに直ぐ側の城山公園へ寄って、天主閣へ登ったが、眺望は美しかった。松江という町は、湖水があり川があり、日本の田舎の小都会としては、最も風致が豊かであるように思われる。ヘルンの印象記を案内書として、この市中や近傍の神社仏閣、丘陵河海を歴訪したら、有振れた散文的な土地でも、詩趣を帯びているように見えるだろう。

日本に紀行文は多くとも、私の見たかぎりどれもどれ

も型の如くと云った感じがする。芭蕉の「奥の細道」の如きも、詞書つきの俳句集としては傑出しているのであるが、紀行文としての妙味は極めて乏しい。

出雲という国では、神代の影が、今なお映っているように私にさえ感ぜられた。大社の境内に立った時、稲佐ノ浜に佇んだ時、その他さまざまな歴史的遺跡に立った時、古伝説が生氣を帯びて浮んで来る。一群の人類が新しい土地に於て新生活をはじめようとする原始時代の光景が、私には興味ある想像となった。

出雲は神道の本場であるだけに、神社が多い。ツーマ

ツチである。奈良近傍に寺院の多いのと同様である。ナポレオンは、ロシアへ入って僧院の数の多いのに驚いて、「これは文明の進歩しない証拠である」と云ったが、文明でも非文明でも、人間の心は何事かの宗教意識から離れることは出来ないのである。私はソヴェートロシアが、国民の心から完全に宗教を放逐し得られるものではないと思っっている。アメリカの禁酒令が不成功に終わったのと同じ経路を辿るだろう。ヘルンは神道について云っている。「神道の真髄は、書籍にも儀式にも誠律にも存しないで、国民の心情の中に生きている。神道は即ち国民心

情の永遠不朽であつて、しかも無限に若々しい最高の感情的、宗教的な表現なのである。異様な迷信とか、無邪気な神話とか、奇怪なる魔術など、外部に露出した鉦脈の遙かの裏面には、国民のあらゆる動機、能力、直観を含めた全部の魂、即ち偉大なる靈力が潜在して慄ふるえているのである」

この感想は当り前の観察である。今日の日本人の心にも、古代神道の影は宿っていると私は思う。古代に潑はっらつ刺としていた人間の生存の靈力は今人の心にも、弱いか強いか存在しているのである。

だが、ヘルンなんか日本鼻屑の西洋人の説を有難がつて、日本の神道だけがそうだと思つたら、見解の狭小を私は認めるのだ。欧米諸国に於ても、土耳其トルコに於ても、波斯ペルシャに於ても、その他世界の国々の古宗教、古伝説をよく研究したら、そこには、「国民のあらゆる動機、能力、直観を含めた全部の魂、即ち偉大なる靈力が潜在して働いている」に違いないと、私は想像している。一群の人類が一国家をなして幾代も生存を持続するには、靈力とか理想とかで、自からそこに有つたに違いない。日本だけが、日本の神道だけがそれを有っていると、ヘルンが思

っていたとしたら、彼れは、その点では心の盲者である。

私は、市の中心であるらしい大橋の上に立って、水郷の賑いを見たが、自分に何の利害関係もなくして、世人の生活を傍観する旅人の気軽な心持を経験した。ヘルンもそうであつたが、彼れは日本語を知らなかつたために、通訳者からいい事ばかりを聞かされていたのであろう。我々が西洋を旅する時に、言葉がよく解らないために、自分に対して侮蔑的言語の放たれているにも気づかないで、不可解な異国語に音楽的妙味を感じたりするようにならねば、ヘルンも出雲言葉に夢の国の音声を感得していたのかも



知れない。

彼れが若し、日本語に通曉していたなら、出雲言葉に言語美をも音楽美をも覚えなかつたであろう。何事も知らぬが仏である。大橋の上に立って、そのほとりに活動している世相を風俗画として見ていると面白いが、そこらの人々の実生活に徹したら、やすやすと詩的情緒なんかは起す余裕はないだろう。私はこの頃帰郷しているの  
でそう感じている。

私は、それから、乗合自動車で郊外の八重垣神社へ向  
った。空はまだ霽<sup>は</sup>れ切らない、雨後のぬかるみ道で、神

社前で下りたのは、私一人であつた。縁結びの神として由緒のあるらしいこの神社は、日御崎神社や美保神社のように、山海の勝地を占めて、厳しく根を張っているのではなく、田圃の中に、しよんぼり古ぼけた姿を現わしているに過ぎないのは意外であつたが、よく見ると、古色蒼然たるところに、新築の神殿よりも有難味があつた。苔の蒸した狛犬は、神さびたユーモラスな趣きのあるもので、狛犬の中の逸品である。神社の後には、稲田姫が大蛇の毒気を避けるために巨大杉の樹の廻わりに八重垣を造って隠れていたという遺跡がある。

ヘルンが興味を感じた鏡ヶ池もそのほとりにあつて、「恋する人は紙で小舟を作り、一厘錢を乗せ、水に浮べて注視すると云う習慣がある。紙に水が溶み込むと、銅貨の重さで底へ沈んでも、水が澄んでいるから判然と見える。若し蝾螈いもりが近寄つて来てそれに触れると、恋する人は自分の幸福は神意で保証されたものと信ずる。しかしながら若し蝾螈が近寄つて来なければ不吉の兆であると云われている」そうだが、こんな伝説はちつとも面白くない。

迷信的伝説は、世界中どの国にも、どの山の中、田舎

のはてにでも、浜の真砂の如く存在しているのであろうが、ヘルンのような趣味では、支那の怪談や、馬琴など徳川時代のグロテスクな挿話に充ちた小説を読んだら、無数の興味ある話題を見出したであろう。

私は、狭い境内を一巡したあと、鳥居の前に立って乗合の発車時刻を待っていたが、その田圃道の一端に、ふと少女を伴った老人の姿が見えた。老人はヘルン好みの菅笠をかぶってトンビを着て草鞋わらじきやはん脚絆を着けていた。少女は手拭で髪を包み、赤い脚絆を着けて草鞋を穿いていた。どちらも竹の杖をついてスタスタと歩んで、此方

へ近づいたが、少女の顔は可愛らしかったが、顔立は老人に酷似していた。鳥居を入れて神殿の前に立って、二人並んで額ぬかずいて何かの祈願を捧げていたが、それがすむと直ぐに引返して、脇目も触らず、今来た田圃道をスラスラ歩んで行った。

この父子を目送していた私は、迷信的伝説なんかよりは、一層の興味をそこに感じた。漠然と神社なんかを訪ずれている私などよりは、少女を連れて願掛けに神詣でをしている老人の方が心が豊かであるらしく察せられたが、私は今なお孤独の悲哀を痛感し得られないのである。

人の世の寂しさは若い頃から絶えず味っていても、肉親縁者に付纏うるわれる煩うるささを喜ぶ気にはなれない。

シエークスピアの「タイタス、アンドロニカス」中の一人物が、「地獄の消えずの火の中で焼かれながら生きていたい」とほざいた。あの強烈な積極的な意気は、私は有っていないが、ファウストの洩らした「おれが此天地に別れてしまうことが出来たら、それから先はどうにでもなるが好い」という言葉には、私は甚だ共鳴している。

私は、この八重垣神社に祈るべき何の願いをも有っていない。今更「私に美女を賜われかし」と祈ったって

じまらない。むしろ、重盛のように熊野神社に詣でて死を祈った方が相応しいかも知れない。

八重垣神社から松江へ戻って、それから、玉造という温泉場へ、やはり乗合自動車で出掛けたが、出雲地方では、大抵の客が降りかけに、「有難う御座いました」と運転手に礼を云うことに気づいた。山陽道よりもそれだけ多く田舎びているのである。玉造は、太古からの曲玉まがたまの産地で、今でも馮瑠細工めろうが名産になっている。温泉は湯が綺麗で豊かだ。それに部屋ごとに炬燵そなえつが具付けられている。

山陰道は温泉と炬燵のために人間が惰弱だと、或軍人が叱咤していたことを私は思出した。温泉あり炬燵あり、いたる所に芸者あり三味線あり、按摩もある。どの土地にもその土地に相当した享楽機関が備えつけられているから便利だ。大社参拝の帰りに、こういった温泉に浸つて、安来節を聞きどじょう鱒すくいを見て、ドンチャン騒ぎをするのは、宗教心の発露と享楽慾の満足とを兼ね得ていると云っていい。

私は、炬燵に当って、周囲の騒ぎを耳にしながら、「出雲に於る小泉八雲」を通読した。



ヘルンは、或時、学生に向って、「世の中に何が一番恐ろしいか」という課題を出して、生徒が、地震とバクテリアとか、さまざまな答案を書いたうちで、そのうちの一人が、「人が一番恐ろしい」と書いたのが、最も彼れの気に入ったそうである。それで、彼れはその答案を元にして人の恐ろしい次第を諄々じゆんじゆんと説いたそうだ。虫類を愛し蛙を愛し、いろいろな小動物を愛し、蛇や鼯いたちをさえ害させまいとした彼れも、人間を恐ろしく思っていたのである。西洋人を避け宣教師を嫌い、ニューヨークや東京を厭い、松江のような風光明媚な異国の地に夢

の国を見ていたのであったが、彼れは異国の田舎の人間をば、彼れの規定した「人間」という者の範囲に入れていなかったのであらう。別種の生物としていたのであらう。真に人間を恐ろしと感じた上は、松江の人間だって、都会入や西洋人と異らない恐ろしい分子を有っていることを認めなければならぬのだ。私は、必しも人間を恐ろしいものとは思わないが、次第にわずらわし煩いものと思われなければならない。人と交るにも淡々として水の如きをよしと思つてゐる。

ヘルンは異国の詩人として日本を描いた。若し西洋の

傑すぐれた画家が日本に渡来して、ヘルンが心酔したように日本に心酔して、日本の自然を描き風俗を描いたら、在来の常套的・日本趣味から脱却して、新たな目で日本の国土を翫賞し得られるようになるかも知れない。

私は出雲を旅行しながら、行く先々で原始的日本の光景を追想するとともに、絶えずヘルン先生の足跡を念頭に浮べた。

(昭和八年五月)



日本文学電子図書館

---

## ヘルンの旧居

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文学大系16 正宗白鳥集  
筑摩書房

昭和44年7月15日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館